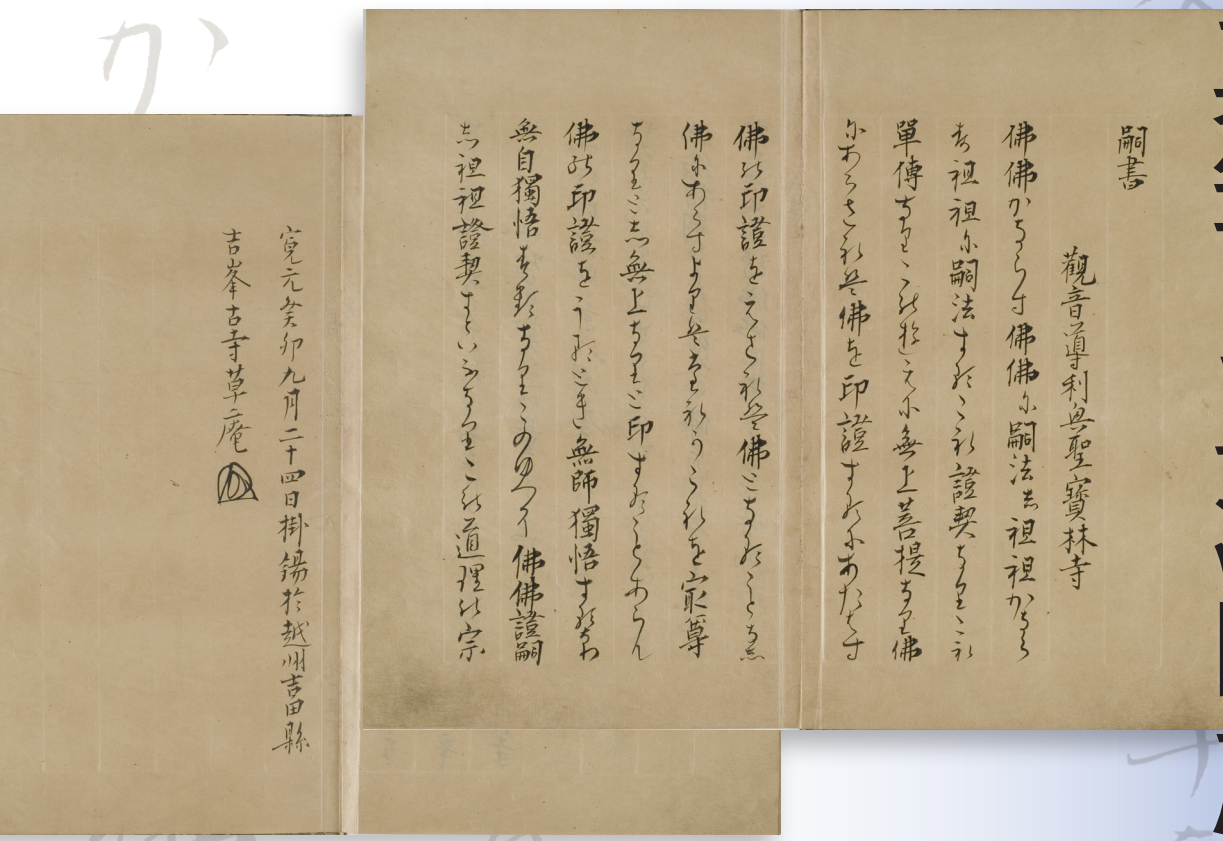
駒澤大学禅文化歴史博物館所蔵

道元禅師真筆『正法眼蔵嗣書』



駒澤大学禅文化歴史博物館

The Museum of Zen Culture and History,Komazawa University

『嗣書』収蔵の勝縁を慶ぶ

道元禅師研究の一環として、私自身が関心し、時に採訪探索して今日に至っているものに、禅師の真蹟に関する資料の蒐集がある。その思想・信仰に参じ究めんとするときに、自らの説論・行証の真偽を検証・証験するに確かなる判憑を得る明証としても、さらには『正法眼蔵』の成立論、書誌学的解明に当たっても、もし禅師自筆の著作が現存していて、直かにこれを閲覧し照合することが出来れば、参究者にとっては、僥倖の極みというべきものであろう。

この度、当館に収蔵された『嗣書』一巻一冊の写本は、まさに道元禅師の『正法眼蔵』の一巻として、然も真蹟による貴重なる一書である。該本は、曽て所蔵者により吾が宗門に譲与の提示がなされた経緯があったものの、以後、その所在は杳として知れずに、今日までに至っていた。図らずも今回、再出現の該本を当館に収蔵されたということは、単なる稀覯本の入手ということにとどまらず、吾が宗門にとっては、禅師の〝煖皮肉〟そのものとして尊崇・鑽仰せられるものであると共に、さらには国の文化財としても、誇るべき無価の価値と意義とを有するものというべきものである。

真蹟本出現の勝縁を深く慶ぶと共に、大学当局、及び関係者各位の該本収蔵への迅速なる英断と、さらに一般公開・展覧への努力とを、高く讃えたいと思う。

駒澤大学名誉教授　文学博士　河村孝道

『嗣書』（表紙）

漆塗杉箱（畠山牛庵箱書）

寛文 3(1663) 年　畠山牛庵の折紙

『嗣書』（ししょ）の概容

冊子本，一巻一冊，粘葉装，32 葉，雁皮紙、古金襴表装（後世の改装），銀切箔裏表装（後世の改装），縦 23.6 cm・横 14.4 cm

漆塗杉箱入：縦 27.3 cm・横 18.1 cm・高 5.2 cm，箱書「嗣書　曹洞宗開山道元和尚真蹟」（金泥），貼紙 3 枚「鶴（朱字）」，「貳　四番長棹入（朱字）」，1 枚不読，蓋裏書「随世（花押）」（金泥）

中桐箱：縦 25.2 cm・横 15.8 cm・高 2.1 cm，紐付き，蓋裏貼紙 2 枚「嗣書　曹洞宗開山道元和尚 印」「墨付三十枚　白紙弐枚　外題有札有」

【添付資料】

折紙：寛文 3(1663) 年 9 月，畠山牛庵［筆］，奉書紙，縦 39.0 cm・横 53.0 cm，本文「嗣書全部一冊者　曹洞宗開山道元和尚真跡無疑似者也　尊命不能固辞　漫染腐毫　以証之而已　寛文三年舞射上旬　牛庵法橋随世 印」

添状：（寛文 3 年・1663)9 月 12 日，畠山牛庵［筆］，後藤覚兵衛［宛］，楮紙，縦 31.6 cm・横 45.2 cm，本文「嗣書全部一冊者　曹洞宗開山道元和尚真跡無疑似者也　代物之儀　不案内御座候へ共　貳百貫程可仕候　其御心得可被成候　恐惶謹言　九月十二日　随世（花押）」，端裏書（切封）「畠山牛庵随世　後藤覚兵衛様人々御申候」

差紙：（寛文 3 年・1663)9 月 12 日，畠山牛庵［筆］，楮紙，縦 17.4 cm・横 17.5 cm，本文「道元和尚法語之一冊代物之儀　不案内ニ御座候へ共　貳百貫程可仕候哉　以上　九月十二日　牛庵法橋」

折紙・添状の包紙有：上書「一り□（朱字）道元和尚筆　畠山牛庵折紙壱通　同人代付指紙壱枚」

折紙・添状・差紙の包紙有：上書「一り㊇（朱字）道元筆嗣書　牛庵　折紙　差紙」

書簡：（昭和 13 年・1938)12 月 23 日，大久保道舟草［筆］，里見忠三郎殿侍史［宛］，洋紙罫入便箋，封筒有

書簡：（昭和 17 年・1942)7 月 22 日，飯田利行［筆］，里見忠三郎様侍史［宛］，画仙紙，封筒有，名刺同封（駒澤大学教授飯田利行）

【関係資料】

手紙：昭和 24(1949) 年 7 月 12 日，里見忠三郎［筆］，田中政信様［宛］，往信用葉書

目録：大正 13(1924) 年 6 月，中扉「旧伊予西条藩主　子爵松平家御蔵器入札」

『道元』（雑誌）：昭和 12(1937) 年 6 月，道元禅師鑽仰会，大久保道舟「道元禅師御真筆正法眼蔵嗣書に就て」を掲載

岩波文庫『正法眼蔵』上巻：昭和 14(1939) 年 6 月（初版本），岩波書店，衛藤即応校註，口絵に『嗣書』の写真掲載

表紙　『嗣書』冒頭（2 葉裏・3 葉表）・同末尾（30 葉裏・31 葉表）

文中挿絵　「高祖道元禅師行跡図」（対幅，嘉永 6 年・1853，当館蔵）より

― 解説 ―

道元禅師と『正法眼蔵』

道元禅師（一二〇〇―一二五三）は、京の公家・久我家に生まれました。三歳で父を、八歳で母を亡くした禅師は、世の無常を感じ、十三歳の時、比叡山延暦寺に登り出家を志します。やがて栄西が伝えた禅宗に関心を示した禅師は、建仁寺で栄西門下の明全に学び、貞応二（一二二三）年に明全とともに中国に渡りました。諸方に仏法を参学し、のちに天童山（現浙江省）の如浄に師事して仏法を嗣いで、嘉禄三（一二二七）年に帰国しました。日本への正伝仏法の展開はこれより始まり、日本曹洞宗の展開もこれ以後のことです。

『正法眼蔵』は、道元禅師の代表的な著作として知られ、「仏法の真髄をあまねく包蔵せる書」といった意味があります。寛喜三（一二三一）年に著した『辦道話』の巻に始まり、以後建長五（一二五三）年の『八大人覚』の巻に渉り、正伝の仏法を説き示したもので、道元思想の集大成として、また日本曹洞宗の根本宗典として今日に伝わっています。

建暦 2(1212) 年　比叡山に登る道元禅師

貞応 2(1223) 年　明全とともに中国に渡る

嘉禄元 (1225) 年　如浄との出会い

仁治 3(1242) 年 (『嗣書』草案の翌年)
興聖寺に集う信者たちに仏法を説く

寛元元 (1243) 年 (『嗣書』修訂の年)
永平寺の地を目指す

道元禅師の真筆類について

道元禅師の真筆類は現今では稀少であり、その真偽判定の問題はあるものの、伝承されている筆跡・断簡類など、数十点をあげることができます（主要参考文献参照）。うち『正法眼蔵』は、まず『嗣書』の巻（草案本）断簡十四点、『諸法実相』の巻断簡十二点があげられます。これらは、元来一つの巻であったものが、長い歴史の中で道元禅師を慕う者に分け与えられ、いわゆる「切」となっていて、所蔵先の名を冠して「永平寺切」「大乗寺切」などと称されています。

次に一冊の体を成すものとしての伝承本には、『行持下』の巻、『山水経』の巻、『祖師西来意』の巻、『嗣書』（修訂本）の巻など、わずかに数種類ほどです。

『嗣書』伝承の様相

当館所蔵の『嗣書』とは、道元禅師修訂の『嗣書』のことを指します。『嗣書』には、断簡の草案本と、一冊本の修訂本があり、草案本は仁治二（一二四一）年に、道元禅師が山城興聖寺（京都市伏見区、現在は京都府宇治市に移転）で著した草稿で、修訂本は寛元元（一二四三）年、道元禅師が永平寺を開く直前に入った越前吉峰寺（福井県永平寺町）において、その草案本を推敲修訂したものです。

修訂本『嗣書』は、のちに伊予西条藩主松平家に伝来し、大正十三（一九二四）年に同家から売立に出され、京都の古美術商・里見忠三郎氏の所蔵となりました。このため「里見氏旧蔵本」と呼ばれてもいます。当時、東大史料編纂所に勤務していた故大久保道舟氏（駒澤大学総長）によって撮影され、世に紹介されました。しかし、戦後に里見氏から売りに出され、以来所在不明となっていました。

以後修訂本は、大久保氏によって撮影された写真が、文末に記した主要参考文献などに掲載されてきましたが、原本の行方は不明のままでした。平成十九（二〇〇七）年、実に五十数年ぶりに再び世に姿を現しました。

また、草案本『嗣書』が、断簡であるのに対し、本書は冒頭から末尾まで一紙も欠けることのない完本として、極めて貴重といえます。

『嗣書』(草案本) の所蔵先

永平寺切 (福井) ※2 点	神応寺切 (京都)	陽松庵切 (大阪)	瑞雲院切 (山形)
大乗寺切 (石川)	永光寺切 (石川)	禅定寺切 (京都)	長田切 (神奈川・個人)
香積寺切 (広島)	円通寺切 (茨城)	青龍寺切 (滋賀)	興聖寺切 (京都) ※2 点

『嗣書』の添付資料紹介

真筆本の価値は金銭で計れるものではありませんが、本書に添付されている折紙・添状・差紙と称する資料から、江戸時代の評価を推測することができます。これらは、江戸時代の古筆鑑定家・畠山牛庵（随世）によって寛文三（一六六三）年に記され、本書の鑑定書のような意味を持っています。

このうちの添状には、「曹洞宗開山道元和尚の真跡なり」と記し、「代物之儀、不案内に御座候共、弐百貫程に仕るべく候」、とあって価格的には二百貫程の価値と評価されています。一両は四貫なので、二百貫は五十両となります。よく一両は十万円程度といわれますが、江戸時代の貨幣価値は、米相場を基準に変動していたので、一両が現在の何円と表現するのは困難ですが、寛文時代の一両は、米八十升分、大工の日当二十日分といわれています。また、一両あれば庶民は一ヶ月生活でき、十両盗むと死罪（公事方御定書、一七四二年）とされていたので、五十両の価格がどれ程のものかが推し測れるでしょう。

このほかにも、里見氏宛ての故大久保道舟氏の書簡（昭和十三年頃）、故飯田利行氏（駒澤大学教授）の書簡（昭和十七年頃）なども添付されています。ともに写真撮影に対する礼状で、宗門学者による真筆本への関心のほどがうかがえます。

『嗣書』の内容

禅宗では古来、仏法を継承する「嗣法」の証として、釈尊以来の系譜を書き記した「嗣書」が、師から弟子に授けられました。『嗣書』は、面授嗣法（師と弟子との仏法の人格的相承）の意義と、嗣書授受の重要さを説く内容です。最初に説示場所として「観音導利興聖宝林寺」とありますが、これは、草案本を著した山城深草の興聖寺を指します。以後、一行当たり十七～十八文字、一頁に六行ずつ配し、五十七頁に渡り計三百三十六行、約五千九百文字が、仮名交じり文で綴られています。

書き出しは、「仏仏かならず仏仏に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する」、すなわち「仏法の継承は、必ず仏から仏へ、祖師から祖師へと伝達相続されるもの」と説き、ついで、釈尊以来、脈々と継承されてきたこと、「この仏道、かならず嗣法するとき、さだめて嗣書あり。もし嗣法なきは天然外道なり。」と、嗣法と嗣書の一如なることを明示されています。この真義に反して、近年では、実際に師より嗣書を授からずに、ただ師の法語（仏法の道理を説いた語）と頂相（肖像画）だけを手に入れて嗣法の証とする弊風があることを批判されています。さらに中国での見聞をもとに、禅宗諸派の嗣書の書式について、その相違点などについて述べられるとともに、「白絹の表背せるにかく。表紙はあかき錦なり。軸は玉なり。長九寸ばかり、濶七尺余なり。」など、当時の嗣書の裂地、材質、大きさなどについても記されています。

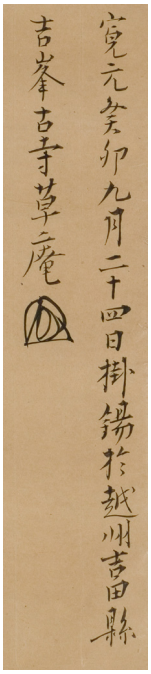
最後に、師・如浄と交わされた嗣法についての問答を記し、「このとき道元はじめて仏祖の嗣法あることを稟受（受ける）するのみにあらず、従来の旧窠（誤てる考え）をも脱落するなり。」と、如浄の指導により嗣法の真義に得心された心境を述べて結んでいます。

末尾には、仁治二（一二四一）年三月二十七日、山城興聖寺にて草案を作成した旨の自署と、寛元元（一二四三）年九月二十四日、越前吉峰寺にて修訂した時の道元禅師の花押が記されています。

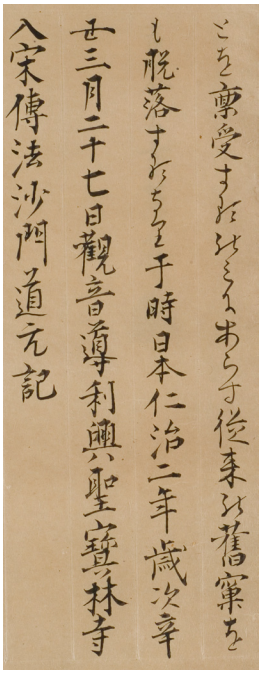
現在、曹洞宗門では、この『嗣書』の教えを受け、嗣書は師から授与される「室中三物」（嗣書・血脈・大事）の一つとして尊重され、嗣法の証として重要視されています。（駒澤大学禅文化歴史博物館　塚田　博）

建長 4(1252) 年　病をおして『正法眼蔵』最後の巻『八大人覚』を説く

寛文 3(1663) 年　畠山牛庵の添状



修訂時の花押
(31 葉表)



草案時の署名
(30 葉表)

『嗣書』(修訂本) 写真版が掲載されている主要参考文献

『道元禅師全集　附　道元禅師真筆集成』(大久保道舟編 , 筑摩書房 , 1970 年)
『永平正法眼蔵蒐書大成別巻　道元禅師真蹟関係資料集』(大修館書店 , 1980 年)
『道元禅師 750 回大遠忌記念出版　道元禅師真蹟集』(大修館書店 , 1999 年)

駒澤大学禅文化歴史博物館
The Museum of Zen Culture and History,Komazawa University
〒 154-8525 東京都
世田谷区駒沢 1-23-1
TEL(03)3418-9610
FAX(03)3418-9611
http://www.komazawa-u.ac.jp/cms/zenbunka/

2008.6.9